

アンソニー・トロロープ作

桜井則子訳

## 自 伝

An Autobiography, by Anthony Trollope, Translated by Noriko Sakurai

### 第一章 教育（一八一五年〜一八三四年）（その二）

この頃、ひと夏の休暇をずっとリンカンズ・インの父の弁護士事務所で過ごしたことがあった。休みの間、寮から家に戻ってくる私をどこでどう過ごさせるかは、頭痛の種になっていたようだ。この時は、古びて見捨てられたままの建物のまわりをぶらつくか、縦二段組みのシェークスピアを読む事だけが気晴らしだった。この本は今でも所有しているが、当時はシェークスピアだから読んだのではなく、それしかなかったのだ。

その後、兄はウィンチェスターを去り父に同行してアメリカに向かったが、一難去ってまた一難、別の苦勞が降りかかってきた。学費が未納だったのだ。生徒相手の出入り商人たちに、私への掛売りをしてはならぬというお達しが出された。ブーツ、ベスト、ハンカチーフなどはあまり校則にしばられず、皆が自由に身に付けられる物だったが、私には手の届かないぜいたく品になった。周りの生徒たちはもちろんその事情を知っていたから、まるで南部インドのカースト最下層民である「パリア」のように接してきた。

少年たちが残酷なのはその本性のようなものだが、彼らはお互い残酷な仕打ちをし合っていて、心が深く傷つくことがないのだろうか。ときにはこんな問い掛けを胸の中でしたものだ。だが、私自身はといえば、ひどく傷ついた！ 残酷さに立ち向かう術を知らなかった。心の痛みを打ち明けられる友達は一としていなかった。ずうたいが大きく、ぎこちなく、醜く、まったく見苦しい様子でこそこそと人目を避けていたに違いない。服装もひどく、汚かったのは言うまでもない。今でも、若かりしわが心の受けた苦しみは、薄れることなく記憶に刻みこまれている。「いつもこうして孤独でいなければならぬのか。いっそのこと学校の教会の塔によじ登り、そこから何もかも、この命さえも捨て、人生に終止符を打ってしまいたい」と、悩み苦しんだこともあった。

けれども商人から品物が手に入らなくなるよりも、さらに悪いことが起こったのだ。生徒はだれもが「バトルズ」と呼ばれる小遣金を毎週一シリングずつ受け取っていたが、この金は副校長が自分の懐から前払いで渡しているものだった。ある日その副校長から「お前のバトルズはもう支給できない」と言い渡された。過去半年間立て替えてきたバ

トルズが依然として払い戻されていなのが理由で、もうこれ以上立て替える気にはなれないと言われたのだ。『バトルズ』は唯一の小遣で他に金を手にする当てはなかったのだが、この一シリングがもらえなくなるのはさして苦痛ではなかった。ただ惨めなことに、生徒全員がこのいきさつを知っているのだ。――

時々、半年に三、四回のことだったと思うが、この一シリングの『バトルズ』を七十人の生徒全員から集めて、学校の用務員たちがあれこれと仰せつかっている雑用の報酬に充てていた。したがって、その中のだれかに順番が回ってきたとき、その用務員は七十シリングではなく六十九シリングを受け取り、なぜ一シリング足りないのか、その理由を知らされたのだ。用務員を見るたびに、その男がもらえるはずの金を私がくすねてしまったような気持ちになったものだ。

ウィンチエスターでの月日が三年を過ぎた頃、父がイギリスに帰国し、私の退学を決めた。学費の支払いが難しかったせいなのか、ニューカレッジに進学する見込みがないと考えたからなのか、理由は分からない。実のところ、私はニューカレッジに入れたと思う。その年にはかなりの欠員が生じていたからだ。でもそんなことは無意味だった。学校創立者が寄付した基金から出る奨学金で学費の一切が賄われるなら話は別だが、家には私を大学に行かせる金などまったくなかった。たとえオックスフォードに行けたとしても、不幸な結果を招いていたに違いない。

ウィンチエスターを去った時、九年生にしか進んでいなかったもので、後三年間も学校に通わねばならなかった。父はこの時、母と妹たちをすぐ上の兄と一緒にアメリカに残し、二度目に借りた農場の、ぼろぼろで今にも倒れそうな農家に住むようになっていた！そして私もそこに連れて行かれた。ハロー・ウィールドという所でハローからは三マイル近くも離れていたが、教区内だった。そしてこの家から再びハロー校に通うことになった。

この様な学校で学ぶ少年がいつもどんな格好をし、どんな身の回りの品を持っているかを知っている人達に思い描いてもらおう。学校生活でのちょっとした問題や雑事に加え、一日に合わせると十二マイルもの距離を歩いて通っていた私が、その中に混じってどんなありさまだったか。この惨めで汚い細道を毎日二往復していた十八か月間が人生最悪の時期だったように思う。私はすでに十五歳を過ぎていて、人との交わりのすべてから締め出されるのが、いかに惨めであるものか、はつきりと身にしみ分る歳になつていた。友達が誰もいないだけではない。周りの人間すべてから蔑まされていた。

引越した家がありふれた農家で、そのうえ横にある馬を洗う池に今にもくずれ落ちそうになっていた。家から馬小屋へ、馬小屋から納屋へ、納屋から牛小屋へ、そして牛小屋から肥やし用の山へと順々にもたれかかっている、いったい何処でどう区切れているやら、よくわからなかった。父は大きな書物に囲まれて居間にこもって暮らしていたが、私は農場の管理人の娘につぶな恋心を寄せながら、時間があればほとんど台所にいたし、これほど楽しいことはなかった。学校での恐怖の時を過ごした後、夜の間、こ

うして農家の台所で過ごす時間が最もすばらしい一時だったが、昼と夜との差が大きすぎ、ますます残酷になった。

ケンブリッジで学費を免除される特待免費生が、学生付きの下僕になって働いたり、オックスフォードの給費生も礼拝堂で聖書の朗読をしているが、彼らがけっして楽しい毎日を過ごしているわけではない。今はともかく、半世紀前はつらいものだった。でも、その立場は世間に認められており、その不幸な境遇も想像できる。上流階級の子弟が行く学校のお情けにすぎる学生が現れるとは、だれもが考えつきもなかった。何の権利があつて、みすばらしい、堆肥のにおいがしみこんだ農家の子供が、貴族の子弟や、それどころではない、年に一万ポンドも稼ぐ大商人の子弟と机を並べるのか。

私が耐え抜いた屈辱は話すまでもない。振り返ってみると、教師も生徒たちも全員が私に背を向けていたように思う。遊びにはいっさい入れてもらえなかった。また、何も教えられていないのだから、何も学びようがない。教科書代以外に通学生が支払わなければならなかったのはチューターへの謝礼だけだった。たしか十ギニー(二百十シリング)ぐらいだったと思う。私のチューターは謝礼なしで引き受けてくれたが、その事を他の生徒たちの前で話しているのを聞いた時には、感謝の気持ちも消えうせた。

私は臆病者ではなかったし、鞭で打たれることなど他の子供たちほど恐れはしなかった。しかし三百人の暴君から受けるつらい仕打ちに、真の勇氣なしで立ち向かうことはできないだろうし、そんな勇氣のかけらもこの時には持ち合わせていなかった。いつもこそそそと人目を避けていたし、私がひそかに慕ったり羨んだりしていた周りの人間たちの目には、私など、実に不快な存在だったのだ。ついに反撃せざるを得なくなり、大立ち回りとなったが、その結果私の喧嘩相手はしばらく自宅で療養するはめになった。もし後日、本書が出版されることになったら、何人かの同窓生が生き残っていてくれて、私の学生時代の「孤独な栄光」がデタラメではないと証言してくれるだろう。

(つづく)